

■ 일본에서의 한국학과 한국어교육

語学教育と文化：ネイティブ教師の立場から\*

小澤康則(Kozawa Yasunori)\*\*

< 次 例 >

I. 序論	7. 文化を話題にする
II. 本論	8. 行間を読む学習
1. 韓国語学習の経験から	9. 教室への異文化の導入
2. 受身表現 先生に怒られた	III. 結論
3. 日本語巡回セミナーの愚 これ・あれーそれ	1. 韓国におけるネイティブ教師の役割
4. 教科書は身上不二	2. ある授業報告から
5. 理解の妨げになる文化項目	3. 韓国人教師の見識ある反論
6. 教科書には文化がある	4. 韓国日本語教育の韓国化のために

I. 序論

韓国で日本語のネイティブ教師として日本語教師に携わり20年がすぎた。その間、多くの経験をし、海外でのネイティブ教師の必要性についても肌で感じる事ができた。本稿では、筆者の韓国語学習経験と日本語教育経験を中心に、外国語教育現場からの報告と題して、筆者が韓

\* 본 연구는 서울대 국어교육연구소 주최 제9회 한국어교육 국제학술회의(2007. 10. 27)에서 발표한 내용을 보완, 수정한 것임.

\*\* 한국외국어대학교 일본어과.

国で感じてきたことを紹介し、今後の外国語語教育のためのひとつの提言を試みてみたいと思う。

## II. 本論

### 1. 韓国語学習の経験から

筆者は1984年に韓国に来て、延世大学校の韓国語学堂というところで韓国語の勉強を始めた。教材は、英語で説明が書かれている文法書<sup>1)</sup>と講読教材<sup>2)</sup>だった。教材をもらって下宿に帰り、さっそく文法書の第1課を開いて、まず当惑した。英語で説明が書いてあったからだ。韓国語の勉強をしに来たのに、また英語で苦しまなければならないのかと途方にくれたわけだ。英語の説明は発音と文法の二部構成になっていた。さっそく、その英語を読んでおどろいた。なんとも理解できない書き方がしてあるからだ。単語は特に難しくもなさそうなのだが、何が書いてあるのかよくわからない。これから韓国語を始めようとするのに、第1課からこれでは、将来どうなるのだろうと心配になった。そこで気分を変えるために韓国語の例文を、辞書を引きながら翻訳してみることにした。するとどうも、「私は韓国人です」とか、「あなたは学生ですか」とかが書いてあることがわかった。つまり、あの難解な英語の説明は、助詞を持たない英語圏学習者に対するための説明だったわけだ。それに気がついてからは、比較的楽に韓国語を習うことができた。

1) Chang-Hai PARK, Ki-Dawk PAK(1973), "Korean1 an intensive course", Yonsei University Press.

2) 한국어학당 편(1979), "한국어독본 초급", 연세대학교 출판부.

韓国語の構文は、われわれ日本人にとって、助詞や助動詞に注意すれば簡単に理解することができる。もちろん、発話時に助詞を強く発音しすぎるという弊害もあるが、日本語学習においても、日本語の助詞は強く発音しないものとされてる。しかし学習過程においては、助詞が非常に大切なものであることも事実である。それゆえ筆者は、日本語教育においても助詞を重視している。このときの経験は、現在の筆者に大きく役立っているといえる<sup>3)</sup>。

ところで当時、延大語学堂の学生は女性的な話し方をするとよく言われた。初級学習者にとっては、自分のしゃべっている言葉が女性的か男性的かなど、わかるわけがない。だから、なぜ女性的だと言われるのかもわからなかった。韓国語学習者たちの間では、教材を作ったのが女性だったのだろうか、語学堂の先生に女性が多いからだろうか、まことしやかな説がよくなされていた。

日本語にも、主に女性がよく使うため、女性語といわれている表現がある。また女性はぞんざいな表現は避けるのが普通とされている。だから「はら減った」といえば男性で、「少し大きいわね」といえば女性だと思うのが普通とされている。たまに韓国の女子学生が日本語で「はらが痛い」などと言うのを聞く。文法的には問題ないのだが、筆者ぐらいの年代にとっては違和感を感じる。ジェンダーの立場からは問題ない<sup>4)</sup>といえるのかもしれないが、女性言葉の中性化に比べると、ぞんざいな表現の使用は、まだまだ一般的ではないようだ<sup>5)</sup>。

---

3) 「あげる」、「もらう」、「くれる」の授受表現を教えるときなど、助詞の定着している学生のほうが理解度が高いようだ。

4) 最近の日本語教材では女性語が減少している傾向がある。とくに、筆者に女性がいる場合、その傾向が強い。つまり、女性が女性語を避けている。いっぽう、女性語がある教材の場合でも、女性語のある会話を作ったのは男性筆者である場合が多いようだ。女性語は男性が女性に期待する話し方であるというわけであろうか。

## 2. 受身表現 先生に怒られた

韓国語を勉強し始めた当時、作文の宿題で、どうしても受身表現を使いたい部分が出てきた。ところが、筆者の記憶では受身表現を学んでいない。そこで友人から何冊か韓国語の学習書<sup>6)</sup>を借りてきて調べたのだが、どこにも受身という項目がなく、困ったことを覚えている。日本語ではよく使うものだから、当然韓国語でもよく使うものだと思いきっていただけだ。

ところで、受身というのは日本語でも比較的新しい表現とされているが、現代日本語ではなくてはならないアイテムとなっている。特に、被害の受身とか迷惑の受身といったものがそれである。たとえば、子供が先生に怒られたとする。家に帰って「今日、先生に怒られた」と言ったら、子供には被害者意識があることになる。「先生に怒られた」、だから「恥ずかしかった」となるわけで、それは反省につながっている。ところが子供が家に帰って「今日、先生が怒った」と言ったとする。そこには「先生が怒った」、「先生はすぐ怒る」、だって「先生は短気だから」といったような意識構造があるわけで、被害意識もなければ、反省もない。これを、日本人は無意識に使い分けている。たとえ同じ現象であっても、表現の仕方によって180度の差があるといえる。だから、日本語教育で受身表現を教えるときは、文法的なことも大切だが、その辺の意識構造もしっかり理解させておかないと、学習者は適切な受身表現が使えなくなるということにもなる。社会人になってから上司への報告で、「先方に難色を示されました…」と言うか、「先方が難色を示しまして…」と言うか

5) 最近、女性の間でも女性語が使われず、普通体で会話をする例が増えてきている。

6) 李崇寧 監修・朴成媛 編著(1972), 『標準韓国語—基礎から会話まで—』, 高麗書林. 양호연(1982), 『要説韓国語文法』, 高麗書林.

で、上司への印象が大きく異なる場合もありえるからだ。この二つの表現でどのような違いがあるか、そして企業社会の中ではそれをどのように解釈するかなど、語学教師は適切なときに適切な説明をしなければならず、文化にいかに関わり付けていくかは、ひとえに語学教師の力量にかかっているといえる。

### 3. 日本語巡回セミナーの愚 これ・あれ-それ

日本が経済大国になるにつれ、世界における日本語学習者も増加してきたが、それでも英語やフランス語などに比べて歴史が浅いのは事実だろう。教授法や教材などもずいぶんよくなってきてはいるが、まだまだ開発の余地がある。特に、横とのつながりや、情報が入りにくい海外で日本語を教える教師の中には、試行錯誤を繰り返している人たちも多いのではないだろうか。そういう人たちを助けるために、日本の国際交流基金では日本語巡回セミナーというのを行っている<sup>7)</sup>最新情報に距離を置かざるをえない現地の先生たちにとっては、とてもありがたいセミナーだといえるだろう。筆者も以前、何度か参加したことがある。確かに役に立つ情報を得ることもできるのだが、場合によっては韓国ではあまり役に立ちそうもないことを教えることもあった。その原因は、韓国経由でアメリカやオーストラリアに行くというスケジュールにあったようだ。英語圏と韓国をセットにした場合、どうしても英語圏での経験者を講師として選ぶ傾向がある。ところが、そういう人たちは当然、韓国の事情をよく知らない。だから、時として途方もない指導をしたりすることがある。

---

7) 最近を対象地域から韓国は除外されている。

あるときの巡回セミナーで<sup>8)</sup>、初級の教案を書くというグループワークを課せられた。その時、日本からやってきた講師が『この』と『あの』を教え、それから『その』を教えたほうがよいと指導した。その講師は“this”と“that”という発想からそのように指導したのだろうが、日本語の「こそあど」に対応する表現が韓国語にあるわけだから、そのような指導はまったく必要なく、むしろ弊害だといえる。ところがいくつかのグループでは、その指導をまともに受け取り、「これ」と「あれ」を先に教え、それから「それ」を教えるという教案を作っていた<sup>9)</sup>。

その国や地域の事情や知識をまったく持たない者が、日本で日本語講師をしているという理由だけで、巡回セミナーのような席に立つのであるなら、それは非常に危険なことであるといえる。「日本語教育の本場は日本にある」という間違った認識が、日本語教育の国際化ではなく、日本語教育の日本化をすすめている。筆者も同基金が行う「在外邦人研修」というのに参加<sup>10)</sup>して、世界中から集まった日本語教師たちと話しあったことがある。同じ日本語を教えていても、その国や地域の事情により全く違うということを実感した。韓国には韓国にあった日本語教育があり、日本のものをそのまま輸入しても意味がないといえる。

#### 4. 教科書は身土不二

日本語教育の日本化は、教育の身近な面でも起きている。その一例

8) 日時および担当講師不詳。

9) 日本語と韓国語での「こそあど」がまったく同じだというわけではない。当然いろいろと差がある。特に「そ」に関しては初級でも違いを説明したりするため、巡回セミナーの講師がその点に言及したと誤解した人たちも多かったようだ。

10) 1995年11月末から12月末にかけての約1ヶ月間。世界各国から42名が集まった。

としてある新教材<sup>11)</sup>の作成にまつわるエピソードを紹介しよう。それまでの教材<sup>12)</sup>では挨拶や「こそあど」からはじまり、「～です」、形容詞、形容動詞、そして動詞という順番で進んでいた。それが新教材では「こそあど」、「～です」の次にすぐ動詞が出るという構成をとった。その新教材を見て、教養課程で教える韓国人教師から難しすぎるとの不満が出た。それでは、なぜ新教材がそのようなになったのか。その答えは、新教材を作った人が日本の学校でそのように習ったか、日本で使っていた教材がそのようなになっていたからである。日本で外国人に日本語を教える場合、学生たちの語学能力がどの程度あるかという前に、学生たちが日本語の海の中に放り込まれているという現実がある。彼らにとってはサバイバルのためにも、動詞の習得が求められる。それゆえ、日本で使う教科書なら、たとえ難しくても動詞がはじめのほうに出てくることには理由があるといえる。しかし、それは日本での場合であって、韓国で韓国人に日本語を教える場合は関係ない。普段の生活は母国語である韓国語なわけで、サバイバルではない。それゆえ何も、日本の方式を輸入する必要はないわけである。語学教材は身土不二であるべきだといえる。

## 5. 理解の妨げになる文化項目

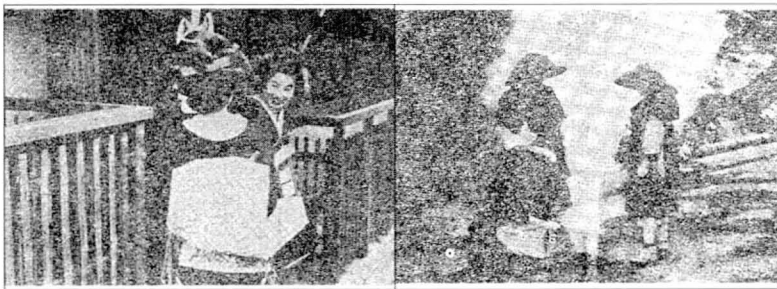
本屋にある外国語教材のコーナーに行くと、数え切れないほどの教材が売られている。正直、学習者にとっては、どれがよい教材で、どれが自分に適しているのかを見極めるのは至難の技だといえる。ところが、

---

11) 韓国外国語大学校 日本語科教材 編纂委員会 編(2007),『初級 日本語 会話』,韓国外国語大学校 出版部。

12) 韓国外国語大学校 日本語科教材 編纂委員会 編(1996),『日本語 会話 I』,韓国外国語大学校 出版部。

筆者が韓国にきた当時は、日本語の教材といっても種類が少なく、なかには日本の英語教材を韓国語訳したものなどもあった。現在のようにカラフルでもなく、写真や絵の入っていない教科書も珍しくなかった。また、写真などが入っていても、適切でないものもあった。



上に紹介した写真はそのような例の一部で、会話の初級編に使われていたものだ<sup>13)</sup>。80年代のものだから印刷状態がよくないが、おおよそのことはわかるのではないかと思う。ところで、この写真はいったいなんと言う題目の課に使われていたのか。左の写真は「訪問」という題目の課で使われていた。写真を見ると、たぶん京都の芸子さんの、新年の挨拶回りではないだろうか。しかし、A：ごめんください。先ほど電話を差し上げました李というものですが、加藤さんはいらっしゃいますか。B：ちょっとお待ちくださいませ。C：ようこそいらしてくださいました。今日は学校はお休みでいらっしゃいますか。(以下省略)といった内容とはまったく関係がない。舞妓と芸子の違いを説明するなどという場合でない限り、必要があるとは思えない写真といえるだろう。

それでは、右の写真はどのような内容のものかという、これは「道

13) 李鏡昊(1984), 『最新 日本語 会話』, 芸苑閣。



をたずねる」という課に掲載された写真である。たしかに道（といっても相当険しい山道のようなのだが）に二人がたたずみ、なにやら話している。ひょっとしたら、道をたずねているのかもしれない。しかし問題は、その人物が旅の修行僧らしいということにある。あまりにも、俗世間から離れすぎている。そして、A：あの…すみませんが丸善という本屋はどの辺でしょうか。B：この通りをまっすぐ行って左に曲がったら、すぐそこです。（以下省略）という本文とはまったく乖離している。一つ一つの写真はたしかに日本文化の一面を表してはいるが、それが適切に使われていないと、何の助けにもならず、むしろ混乱を招くだけである。現在のように恵まれた環境の中で学んできた若い日本語教師には、このような教材は決して使いこなすことができないであろう。

## 6. 教科書には文化がある

最近の教材には、いろいろの工夫がなされている。たしかに、教材だけでもたくさんの種類があるのだから、学習者のニーズにあったものでなければ自然淘汰されていくわけであろう。それゆえ、学習者が日本語を学びながら、自然と日本文化も習得できるようになっているのもあり、場合によると、作者は意識していないにもかかわらず、外国人学習者が見ると、そこに日本文化が盛り込まれているという例もある。以下は、ある教材<sup>14)</sup>の一部だが、そこにも日本文化を見ることができる。

管理人：すみません。管理室のものですが、崔さんいますか。

留学生：はい、私ですけど、何か。

---

14) 韓国外国語大学校 日本語科教材 編纂委員会 編(1999), 『日本語 会話 II』, 韓国外国語大学校 出版部。

管理人：ええ、実は、気を悪くしないで聞いてくださいよ。

崔さん、最近遅くまでギターを弾いているでしょう。

留学生：ええ、来週の留学生歌謡祭に出ることになったもので。

管理人：そうなんですか。それは大変ですね。それで毎晩練習しているわけですか。

留学生：ええ、昼は授業とアルバイトで一杯なもので。

管理人：それなんです、ほかの部屋から苦情が出ているんですよ。うるさいって。

留学生：そうなんですか。知らなかったなあ。誰もそんなこと言わなかったから。

管理人：そういうわけなんです。ですからこれからは、よろしくお願ひしますよ。

舞台は学生マンションで、そこに住む留学生と管理人の会話という設定になっている。内容は管理人が隣室の苦情を留学生に伝えるというもの。留学生は夜、歌の練習をしている。しかし、誰も苦情を言ってこない。だから問題ないと思っていた。場合によっては隣室の人に「うるさいくないですか」などと聞いていたかもしれない。もしそうだとすると、その隣人は「べつに」などと言って言葉を濁していたのだろう<sup>15)</sup>。ところがそこに管理人が訪ねてきて、ほかの部屋から苦情が出ていると注意した。隣室だから、廊下で会うこともあるだろうし、そうでなくても、うるさいと思ったらその場で言えばいい。そのように考える外国人も多いかもしれないが、日本のご近所づきあいでは、面と向かって非難しないことになっている。そして、うるさいのが一回か二回なら、自分が我慢して済ませる。それが大人の態度であるとされている。しかし、この留

15) 留学生の「知らなかったなあ。誰もそんなこと言わなかったから」には、そのような背景がある。

学生は毎晩練習をした。それで、隣室の日本人としては、自分の不満を相手に伝えなければならない。そのために直接隣室のドアをたたくという人もいるだろうが、そうすると人間関係にひびが入り、日本人にとっては修復するのに大変手間がかかることになる。それで直接言わず、管理人を通して言ってもらおうという手段をとったわけだ。日本人論でよく使われる「本音」と「建前」でいうと、建前上は隣室とのあいだに何の問題もないのだが、本音では（管理人を通して）苦情を言っていることになるわけだ。これなどは教師が意識して使えば、日本文化のよい教材になる見本といえるだろう。

それから、このテキストでは、管理人の言葉使いも非常に日本的だ。管理人は苦情を伝えているのだが、そのためにどうしろということは具体的に何も言っていない。「そういうわけなんですよ。ですからこれからは、よろしくお願いしますよ」という抽象的表現で終わっている。相手の理解を前提としている、日本語的な表現だといえるだろう。

## 7. 文化を話題にする

初級・中級においては、教科書から文化を引き出すという作業が教師に課せられることとなるであろうが、上級にあがるに従い、文化を話させるという作業が必要になる。そのために、いろいろな資料を集め、論理的に説明するということも必要であろうが、学習者に話させ、考えさせるという作業も効果がある。以下は「本音」と「建前」を扱った上級教材<sup>16)</sup>の一部である。

---

16) 三井物産(2007), 『New 多楽園 日本語 5』, 多楽園, p.62

- 高千穂：ほお、これが加藤君ご自慢の盆栽ですか。見事なものですね。
- 加藤：いやあ、お恥ずかしい。僕なんか、まだまだですよ。
- 高千穂：わび、さびに通じるっていうか、日本人の心。ううん、まさに世界に誇れる、日本文化の生粋だ。
- 加藤：そういつてもらえるとうれしいよ。だけど、日本が世界に誇れるものといったら、やっぱり高千穂君ご推薦のマンガとアニメ。
- 高千穂：まあ、マンガはすでに一大産業になっているし、文化としても定着している。これからの日本はマンガ立国として生きていくしかないだろうね。
- 加藤：そうなったら、盆栽のような繊細さを必要とする風流の心はどうなるんだよ。
- 高千穂：まあ、もの好きな漫画家が盆栽マンガでも描けば生き残れるかもしれないけど。
- 加藤：盆栽マンガだって。それがお前の本音か。やっぱ、お前みたいな俗物に、盆栽のすばらしさがわかるわけないんだ。
- 高千穂：お前こそ、世界に誇れるものはマンガだなんて建前のくせに。
- 加藤：あたりまえだ。あんな幼稚なもの、なにか産業だ。本音と建前も区別できないオタク野郎が。
- 高千穂：うるさい。本音と建前を使い分ける偽善者が。

同教材はフリートーキングのためのものであるが、フリートーキングを活性化させるための刺激として上記のような会話を導入している<sup>17)</sup>。このような会話を聞けば、公的立場の「建前」が社会や立場から期

---

17) 情報を与えてフリートーキングをさせるという方法もあるが、かえって情報を理解するために時間を使ってしまい、肝心のフリートーキングができないという例がよくある。それより、話題になるような刺激を与えるほうが、効果的なフリートーキングができる。

待されるものであることに比べ、真実の感情や欲求をさす「本音」は要求されることとは異なることがあり、しばしば正直に表現されないことがある、ということがわかる。さらに、その「本音」と「建前」の分離が人間の成長過程では普遍的な現象であるという点を考えるなら、後半部分をうまく活用して、現代日本社会で問題になっている「おたく」「引きこもり」や「パラサイトシングル」の問題へまでと発展させていくことができるだろう。

## 8. 行間を読む学習

先述のように、日本人が書いた日本語の教科書なら、その中には必ず日本文化がある。それは、著者が意識するしないにかかわらず、日本語の中にセットされている日本文化である場合もある。それゆえ、授業のときなど、たとえ会話教材でも、その内容を読ませるようにしなければならない。むしろ、行間を読ませるといふべきであろうか。

たとえば、次のあげる例文は、会話教科書<sup>18)</sup>からの抜粋だ。日本文化とは言い切れないかもしれないが、行間を読ませる練習としては手ごろなものだといえるだろう。内容は、本社の部長（小林）と海外営業所長（上野）の電話でのやり取りだ。

- 小林：ソウル産業か。困ったなあ。とにかくなんとか時間を稼ぐように。  
 上野：時間をですか。で、もし他社が割り込んできた場合にはどうすればよいでしょうか。  
 小林：その場合にはすぐ本社に連絡をお願いしますよ。  
 上野：わかりました。とにかく最善を尽くしてみます。

---

18) 前掲、『日本語 会話 II』, p. 113

小林：いや、いろいろご苦労だけど、よろしく頼むよ。

これは二つの場面から構成されている本文の、第二場面後半部分だが、小林部長の話し方が命令文から丁寧文に変わり、そして最後はくだけた表現になっているのがわかる。小林部長の表現がこのように変化した背景には、上野の受け答えがある。そして、上野の受け答えのどんな部分が小林部長を満足たらしめたのか。それを探っていくことで、日本の会社組織がどのようになっているか、そして、その組織の中ではどのように答えなければならないのか、ということを知る手がかりになるわけだ。

行間を読ませる練習というのは、文化的側面からだけではなく、文法的側面や運用能力といった側面においても、以下の例文<sup>19)</sup>からわかるように重要である。

金：これ、何の刺身でしょうか。

佐々木：ひらめのようなですね。味はどうですか。

金：おいしいですよ。でも、もう少し量があったらいいんですがね。

一見すると、なんでもない受け答えのようであるが、よく考えると、金が佐々木の言葉を理解していないことがわかる。金の質問に対し、佐々木はその外見から「ひらめ」ではないかと推測した。そこで、味はどうかと訊いたわけである。つまり、ひらめの味かどうかを訊いているのだが、金は文脈を読み取れず、おいしいですよと答えてしまった。初級教材などによく見られるのだが、これらは教師のほうでも注意して読み込んでおかないと、つい見逃してしまうことがある。注意が必要であろう。

---

19) 前掲、『日本語 会話 I』, p. 125.

## 9. 教室への異文化の導入

最近では異文化とか異文化接触とかいう言葉が、日本語の教育現場でもよく使われている。教材などを通して文化を知るだけでなく、実際に肌で異文化を体験をしようということであろう。ところで、異文化接触とは、どういうことなのであろうか。次の事例は異文化接触を物語ってくれる一例である<sup>20)</sup>。

H (女性) は29歳で子供がなく、駐在員の夫と水原に住んでいた。彼女は月曜日には仁寺洞まで行って韓紙工芸を習い、火曜と木曜日には江南で韓国語と韓国料理を習っている。ところが、個人的な韓国人との付き合いはご近所との挨拶程度で、ほとんどないと言う。なぜ、あまり韓国人との付き合いがあまりないのか。その理由を聞く過程で、彼女が興味深い韓国人観を示してくれた。韓国人は、すぐぶつかってくるというのだ。道を歩いていてぶつかりそうになるから相手をよけようとする、ところが、相手もわざと身をずらして彼女にぶつかってくるという。

日本では「車は左で人は右」というのが一般的な交通ルールだ。それゆえ、日本人は正面から来た相手を避けようとするとき、自然と右へと避ける。ところが韓国は反対である。それゆえ、韓国人が避けるときは当然、反対側に避けることになる。その結果として両者は激突する。まさに「文化の衝突」である。

異文化接触意をこのようにとらえるなら、教室内に異文化を持ち込むことは容易である。

---

20) 拙稿(2005), 『日本人駐在員妻の韓国文化接触』、『日本語文化』第6輯, 日本語文化学界。

ロールプレイA

あなたは会社員です。会社で仕事をしていると妻のBから電話がかかってきました。用件を聞いて答えてください。

ロールプレイB

あなたは主婦です。同居している義母の調子がよくありません。夕食に義母の好物を作ってあげたいのですが素材が足りません。看病のため買い物にいけないので、夫のAに電話して、会社の帰りに買ってきてくれるよう頼んでください。

上記はごく普通のロールプレイカードである。「～たい」や「～てほしい」、もしくは授受表現などの定着に使うためのものだろう。しかし、このカードのAに、以下のような書き足しをしたらどうなるだろうか。

ロールプレイA'

あなたは会社員です。会社で仕事をしていると妻のBから電話がかかってきました。会社では私用電話は禁止されています。取引先の会社からかかってきたようなふりをして、用件を聞いて答えてください。

Bは当然、A'が夫という立場で答えると期待している。ところがA'の場合は夫としての役割を演じることができず、会社員の役割を固守しなければならない。A'が夫という役割を演じないとき、Bは家庭に対する会社という異文化に接触していることになる。それではAとA'とでは、どのような違いがあるのだろうか。違いは「会社での私用電話は禁止」という情報の有無である。このような情報の有無が異文化を作り出す。そして、それを情報の違い<sup>21)</sup>へと変化させていくことによって、日

21) 授業などで学生から、日本人からもらったインスタントラーメンを食べたが、とてもまずかったということをよく聞く。と同時に、日本に行って食べたラーメン屋のラーメンはとてもおいしかったという話も聞く。日本の醤油や味噌は基本的に



本と韓国の異文化接触を教室内に持ち込むことができる。

### Ⅲ. 結論

#### 1. 韓国におけるネイティブ教師の役割

これまでの筆者の経験談を整理すると、次の三点にまとめることができる。まず、外国語学教育は外国語を扱うのであるが、そのための教材や教育法はその国に適したものでなければならないこと。第二に、その教材の中にはいろいろな文化的要素が盛り込まれているのだが、それらは教材を十分に読みこなさないと見えてこないこと。そして最後に、異文化というのは発信者と受信者との間の、情報の有無や情報の読み違えと理解することができるということである。

ネイティブ教師の役割も、この三点と大いに関係がある。日本語ネイティブ教師が韓国で感じるであろう違和感。そこには情報の読み違いがあるわけであり、一体どのような読み違いがあったのか、もしくはどのような情報が欠如していたのかなどを分析することにより、異文化の解明をすることができる。そして、それを教室に持ち込むことにより、学習者は異文化接触にすることができるわけである。また、教材の中に盛り込まれている日本文化を掘り起こさせるのも、日本語ネイティブ教師

---

は煮立ててはいけない。煮立てると味が落ちる。ところが、韓国の場合は煮立てることによって味を出す。これはラーメンのスープでも同様である。これなどは、筆者が異文化理解の導入によく使う事例だ。筆者自身、初めて韓国のインスタントラーメンを作ったとき、日本式で作ったため麺に味がしみ込まず、韓国ラーメンはまずいと思ったものだ。

の役割である。さらに、そのような日本文化の盛り込まれた教材を作るのも、日本語ネイティブ教師の役割であろう。

## 2. ある授業報告から

日本語ネイティブ教師の研究会で「学生主体のクラス活動を目指して～インタビュープロジェクトの試み～」という発表<sup>22)</sup>がなされた。プロジェクトワークを使った授業の活動報告である。発表者はまじめな、若手の日本語教師であった。だが、発表には首を傾げざるをえなかった。プロジェクトワークには確かによい点がたくさんある。しかし、だからといって、どこでも、誰にでも適用できるわけではない。まして、日本人にインタビューをするというプロジェクトワークなど、韓国では無理があるし、プロジェクトそのものに必然性がない。それではなぜ、このような授業が行われ、授業活動報告までなされたのか。それは、既に述べたことと重なるが、日本語教育の日本化のためである。発表者は日本で学んだことを実践しただけに過ぎない。発表者は文字通り「学生主体のクラス活動を目指して」プロジェクトワークに取り組んだ。しかし発表者が真剣になって取り組めば取り組むほど、結果は滑稽にならざるをえない。そして結局は、先生主体のクラス活動になっている。

## 3. 韓国人教師の見識ある反論

2001年から2003年まで開かれたソウル大学校師範大学の教師特別養成

---

22) 第65回 在韓 日本語 講師 研究会(2004年 9月 4日)にて

課程。その学期末に行われた日本研修旅行のときのことだ。受講生の代表が日本の新聞からインタビューを受け、それが社会面の記事になった。その記事の中に「フランス語やドイツ語からの転向組である韓国の先生たちが、日本語教育の本場である日本に来て…」というような表現があり、それが問題となった。受講生たちが問題視したのは「転向組」という表現。まるで、フランス語やドイツ語では失業したので日本語に替わったという印象を受ける。しかし、教師特別養成課程というのは、フランス語やドイツ語だけでなく、日本語や中国語もできる第二専攻を持つ教師を養成する課程である。その点をはっきりさせるために、新聞社に再インタビューを要請し、文化面でインタビュー記事として掲載してもらい、代表自らが紙上で「転向組」という表現を訂正した。筆者はその話を受講生から聞いたとき、彼らの教育者としての矜持に感心するとともに、日本の新聞記事の皮相な見方に日本語教育の現状を見る思いがした。

日本語を母語としている国は、確かに日本しかない。その意味で、日本語の本場は日本であろう。しかし、日本で行われている教育は国語教育であって、日本語教育ではない。日本語教育は、むしろ海外が本場であった。ところが、日本における留学生や外国人労働者の増加などにより、日本国内での需要が増大してきた。一方、少子化などの影響により、国内での国語教員の需要が減少するという傾向がみられてきた。その結果として、国語教育が日本語教育に「転向」したわけである。

#### 4. 韓国日本語教育の韓国化のために

現在、日本語教育の日本化が進行中である。日本国内の国文学、国語学、そして国語教育学が日本文学、日本語学、日本語教育学と名称

変更することによって、日本語教育に多くの人材が流れ込むようになった。いわゆる供給過多である。その結果、日本国内の日本語教育機関は買い手市場となり、優秀な人材を選ぶようになる。優秀な人材とは、すなわち経験者である。現在日本では経験がなければ就職できないというのが、日本語教育機関の実情である。それゆえ、未経験者が日本で就職するためには海外で経験をつむしかない。日本から地理的にも、文化的にも近く、日本語学習者の多い韓国は、彼ら未経験者が経験をつむには絶好の場所であるといえる。

いっぽう韓国には、「ネイティブ教師最新最善論」とでも言うか、新しい情報に敏感な若手教師を善しとする傾向がある。これは人件費の面からも支持されているようで、常に新しいネイティブ教師を補充し、それを売りとしているような日本語学校もある。このように、日本の事情と韓国の事情は、ともに補完関係にあるといえる。しかし問題は、この補完関係が韓国にプラスになっているのかどうかということだ。

日韓補完関係という状況が続けば、日本語ネイティブ教師にとって韓国とは一時的な通過地点でしかなくなり、韓国の教育現場は日本で授業を行うための練習場という地位に転落するしかない。前述の授業報告のように日本での方式がそのままなされ<sup>23)</sup>、教材も前述のように日本式のもの主流となる<sup>24)</sup>。そして、「この」と「あの」を教え、それから「それ」を教えるという教案で授業がなされることになるかもしれない<sup>25)</sup>。韓国の教育現場が日本の練習場に転落するということは、韓国における日本語教育産業が、日本の日本語教育産業に従属することを意味している。

23) 「ある授業報告から」参照。

24) 「教科書は身上不二」参照。

25) 「日本語巡回セミナーの愚 これ・あれーそれ」参照。

つまり、韓国における日本語教育が韓国人学習者のためのものであるためには、韓国のニーズにあった日本語ネイティブ教師が必要であると言うことになる。韓国にとって有意義な日本語ネイティブ教師を育てることも、語学教育機関にとっては重要な仕事だといえるだろう。\*

## 参考文献

- 日本語教育学会 編(1982), 『日本語教育 事典』, 大修館 書店.  
文化庁文化語部国語課(1994), 『異文化理解のための日本語教育 Q&A』 大蔵省印刷局.  
細川英雄 編著(1999), 『日本語教育と日本事情－異文化を超える－』, 明石書店.

---

\* 본 논문은 2007. 11. 9. 투고되어, 2007. 11. 15. 편집위원회의 심사를 거쳐 게재가 확정되었음.

## ■ 日文抄録

### 語学教育と文化：ネイティブ教師の立場から

小澤康則

韓国には韓国の日本語教育があるべきだ。筆者が韓国の教壇で日本語を教えながら感じることである。日本における日本語教育の現場と、韓国における日本語教育の現場は大きく違う。だから当然であるべきことなのだが、どうも当然でなくなってきた。その理由は日本と韓国の両方にあるだろう。まずは日本語教育の日本化があげられる。日本語教育の裾野が広がれば広がるほど、日本語教育は国際化しなければならないはずなのだが、逆に日本化していくという傾向。ここには、日本語教師の一大市場は日本だという「市場の理論」が存在している。そして、それを日本語教育業界が強化している。いっぽう韓国においては、「ネイティブ教師最新最善論」がある。ネイティブ教師は最新情報に詳しい若手がよいというものだ。インターネットが日常化した現代では、確かに説得力がありそうにみえる。学習者にはいつも新鮮な日本語が提供できるし、人件費の上昇も抑えることができる。まさに一石二鳥に思える。しかし、それはネイティブ教師使い捨て論でしかなく、ネイティブにとっては、韓国は中継地点でしかないという意識を育てさせる結果になる。韓国が中継地でしかないのであれば、韓国に適した教育法や教材の開発に努力するわけもなく、当然日本のものをそのまま借用することになる。その結果として、韓国における日本語教育は、日本の日本語教育市場に従属するはめになる。本稿においては筆者の現場での経験談を紹介することによって、上記のことに言及することにする。

[Key Words] 身土不二, 日本語 教育の日本化と 国際化, 行間を読む, 異文化, ネイティブ教師

■ 국문초록

語學教育と文化：ネイティブ教師の立場から

小澤康則

한국에는 한국의 일본어교육이 있어야 한다. 필자가 한국의 교단에서 일본어를 가르치면서 느낀 점이다. 일본의 일본어교육 현장과 한국의 일본어교육 현장은 크게 다르다. 그렇기 때문에 당연히 그래야 하는데 사실 현실은 그렇지 못하다. 그 이유는 한국과 일본 양국 모두에서 찾아 볼 수 있다. 우선 일본어교육의 일본화를 들 수 있다. 일본어교육의 지변이 확대되면 확대될수록 일본어교육이 글로벌화 되어 가야 하는데 오히려 일본화 되어 가는 경향이 있다. 여기에는 일본어교사를 구하는데 있어서 가장 좋은 시장은 일본이라는 '시장 논리'가 존재한다. 그리고 이 논리를 일본어교육계가 강력하게 뒷받침하고 있다. 한국의 경우를 살펴보면 이른바 '원어민 교사 최신 최선론'이라는 의식이 존재한다. 원어민교사로는 최신정보를 많이 알고 있는 젊은 네이티브 스피커가 좋다는 식의 사고방식이다. 인터넷이 일상생활이 되어버린 현대사회에서는 분명 설득력 있는 생각이다. 또한 학습자에게 언제나 최신 경향의 일본어를 가르칠 수 있고, 인건비 상승도 억제할 수 있다. 그야말로 일석이조인 것이다. 그러나 그것은 원어민교사를 일회용으로 여기는 발상에 지나지 않으며 원어민은 한국을 단지 중계지역쯤으로 생각해버리게 하는 결과를 초래한다. 한국이 단지 중계지역에 지나지 않기 때문에 한국에 맞는 교육법이나 교재를 개발하기 위한 노력은 기울이지 않고 일본 것을 그대로 차용하게 된다. 그 결과 한국의 일본어교육은 일본의 일본어교육시장에 종속당하게 된다. 이 글에서는 필자의 현장 경험담을 소개하며 상기의 사실에 대해 언급하고자 한다.

[주제어] 신토불이, 일본어 교육의 일본화 및 국제화, 행간을 읽는 학습, 이문화, 원어민 교사